

キャラクター名 プレイヤー名

メインクラス	メイジ	Lv.1:		レベル	7
サポートクラス	チューシ	Lv.1:	ニンジャ	性別	男
称号クラス				年齢	17
種族	ヒューリン			境遇	義理の親
出自 (効果)	冒険者			目標	憧憬

	筋力	器用	敏捷	知力	感知	精神	幸運
基本値	13	9	9	22	9	14	6
ボーナス	4	3	3	7	3	4	2
クラス修正	0	1	0	2	1	1	1
他修正							
能力値	4	4	3	9	4	5	3

HP	57
MP	82
フェイト	5

装備品		射程	命中	攻撃	回避	物防	魔防	行動	移動
右手	手提げバッグ								
左手	地獄鍋					5		-1	
頭部	ハット					1			
胴部	封精長衣					5	2		
補助	封精長靴								
装身具	封精韋編								
能力値			4	0	3	0	5	7	9
スキル									
その他									
総計(右)			4	0					
総計(左)			4	0	3	11	7	6	9
総計(両)			4	0					m
ダイス数			2 d	2 d	2 d				

	能力値	スキル	その他	合計	ダイス数
トラップ探知	4			4	+ 2 d
トラップ解除	4			4	+ 2 d
危険感知	4			4	+ 2 d
エネミー識別	9			9	+ 2 d
アイテム鑑定	9			9	+ 2 d
魔術判定	9		2	11	+ 3 d
呪歌判定					+ d
錬金術判定					+ d

所持品	
リンク効果：メイジ	野営道具
	調理用具
ベルトポーチ	ベガスの薬草図鑑
バックパック (売却)	
異次元バッグ	ポーションホルダー
小道具入れ	▼HPP*2
▼ロープ	▼MPP*3→0
▼ランタン	MPP*5→1→0
▼虹の輝き	毒消し*2
父さんが残した巻物	万能薬*1
母さんが残した手帳	

現在重量： 26
 最大重量： 28
 所持金： 64
 預金・借金：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ハーフブラッド	★	-	パッシヴ	-	-	-		
効果： タイミングがメイキングのヒューリン以外の種族スキル一つを修得。ただし幸運基本値-3								
マジシャンズマイト	3	-	パッシヴ	-	自身	自動成功		
効果： 魔法攻撃のダメージに+[SLd]する。								
ファイアロード	5		パッシブ		自身			
効果： <火>魔法攻撃ダメージ+[SL*4]								
コンセントレイション	1		パッシブ		自身			
効果： 魔術判定+1D								
イフリート・シマー	1		パッシブ		自身			
効果： 火魔法ダメを1点でも与えたら対象の命中-1D。ラウンド持続								
ファイアボルト	1	(6-1=)5	メジャー	20m	単体	魔術判定		
効果： 魔術。[5D+41]<火>魔法ダメージ								
リゼントメント	1		効果参照		自身		1/シナリオ	
効果： 単体※に変更しダメージ+[CL*10]								
フライト	1	(4-1=)3	メジャー	至近	単体	魔術判定		
効果： 魔術。飛行状態にし移動力+[SL*5]m。シーン持続								
マジックフォージ	2	3	DR直前		自身	自動成功	1/シーン	
効果： 魔法攻撃のダメージ+[[SL]*2D]								
	1							
効果：								
ハンドシンボル：爆	2	4	ムーブ		自身	自動成功	SL/シーン	
効果： 単体の魔法攻撃を「範囲 (選択)」に変更								
ファイアクラップ	1	(4-1=)3	マイナー		自身	自動成功		
効果： 魔術。<火>魔法ダメ+[SL*2]、[威圧]付与								
	1							
効果：								
ファストイート	1	2	セットアップ		自身	自動成功		
効果： 食糧、料理のアイテムを1個使用								
ダムウェイター	1	5	メジャー	20m	[SL+1]	器用		
効果： 料理のアイテムを対象に使用								

CL1 ハーフブラッド：イモータリティ ファイアロード2 コンセントレイション ハンドシンボル：爆2

冒険者の両親をもつ少年。
 父親は冒険者で世界を飛び回っていたが、母親と出会い、PC①が生まれてからは、両親ともにアークライトを離れることはなくなった。職業冒険者なので冒険に出ることはあり、そういう時は叔父夫婦に預けられていた。物ごころついてからは、自分も冒険に行きたいと言ったが、体力がついてこなかったのだ。そして10年前の【大漂流】の前に両親は行方不明となり、叔父夫婦の下で料理人見習いとして働いている。もっと自分に体力があれば。あるいは、それを補うだけの何かがあれば、両親と一緒に旅できたのだろうか。

一方で、父親の話してくれる冒険の話は、いつも未知に溢れていて、ワクワクが止まらなかった。いつか自分も見に行くのだと思っていたのに、【大漂流】で世界は閉ざされてしまった。なんてことだろう。あんなに世界は広がったのに。

そうした思いを胸に、少ない体力を補うように魔術を身に着け、叔父夫婦の下で料理を覚えた。冒険者のパーティになってくれそうな大人にも目星をつけた。準備は着々と進めてきた。

だからそう、あと少しきつかけさえあれば、冒険の道に足を踏み出すこととなるのは、必然だったのだ。

「僕は行くよ。まだ見ぬ場所へ。両親が旅した、その先にだって」
 「元気の源は食！ さあさあ自慢の一品だよ、食べていきな！」
 「(指パッチン) はい、どーん！」(《ファイアボルト》演出)

